
時の葉一片。 <巻>

亥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の葉一片。 <壺>

【コード】

N6070H

【作者名】

亥月

【あらすじ】

【朱城高校1年D組】のサイドストーリーです。本編にも、いざれ関連していく要素になっています。本作は、千歳と総兵の幼少時代です。

「お祖母サマー、お祖母サマー、ハッピーサマー、楽しい夏ー」

日本風の大きな塀に囲まれた、立派な造りの日本家屋。門の隣に「弓ヶ瀬」と記された表札を掲げた、その日本家屋の中で。広い板張りの廊下で小さい女の子がすたすたと歩きながら、可愛らしい声で祖母を呼んでいた。後半からは違う掛け声が混ざり始める。

金魚が泳ぐ、淡い水色の浴衣に鮮やかな黄色の帯を締めて小さい足袋を履かせられたその女の子は、銀色がかった桃髪を短めに切り揃えられて、頭頂部から耳の後ろにかけて黒い縮緬ちりめんのリボンを通して、髪を纏めるように首の真後ろで結ばれている。

そんな風に磨りガラスが嵌め込まれた障子が立ち並ぶ廊下を歩いていると、後ろから若いお手伝いさんが急いで走り寄ってきて、女の子を捕まえた。

「お嬢様！ 大奥様はお出掛けになられましたよ。早く戻って下さい」

「お嬢サマじゃないです！ 千歳です私は！」

キヤーキヤーと甲高い声で叫びながらライトブルーの大きな瞳を逆三角にし、お手伝いの手を振り解こうとする、自分を「千歳」と称した女の子は派手に騒ぎ始めた。お手伝いの女性が困惑した風に眉を寄せる。

「うるさいわよ」

と、隣の障子がすつと開いた。

冷徹な声の主は、白い菖蒲が咲き誇った黒い着物を優雅に纏って、

紅く光る珠の装飾が輝く簪かんざしで見事な黒髪を纏め上げた美しい女性だった。ただ、冷たく光る漆黒の瞳は鎌首をもたげた蛇のようで、そのせいで冷酷な印象を一番に受ける。

お手伝いは蛇に睨まれた蛙の如く身を竦ませて、小さく早口で「すみません」と頭を下げた。千歳は、円らで大きな瞳をその女性に向ける。

幼い視線と、冷たい視線がぶつかり合う。

「静かにしてちょうだい。頭痛がするわ」

「ズツーがするなら、お薬飲んだ方がいーですよ。お母さま」

ライトブルーの瞳をくりくりさせながら千歳が幼い声で自分の母親にそう言つと、母親は漆黒の瞳を細めた。簪かんざしから下がった紅い珠が、きらりと光る。

「あなたが黙つててくれれば、頭痛はしないわ。頼むから静かにしてちょうだい」

ぴしゃりと閉ざされた障子を見つめたまま千歳は表情を変える事もなく、お手伝いの脇を通り抜けて玄関へと向かっていった。

その後から急いで彼女の後を追うとお手伝いは下駄を履き終えた、その小さい後ろ姿を呼び止めようとした。

「お、お嬢様！ 私もご一緒いたしますので、少々お待ちに……」

「いいですよ、別に」

「し、しかし」

戸惑つてお手伝いが千歳と目線を会わせる為に身体をしゃがませ

ると、ライトブルーの瞳とすぐに視線がぶつかり合った。まだ幼いの世の中を既に冷めたように見ている感じがして、ぞくりと鳥肌が立った。

「私がお外に出る時に付き添わなかったからって、咎められる事はないですよ」

さんご色の唇に笑みを浮かべてこくりと小首を傾げると、ちりめん縮緬のリボンと桃髪が揺れた。

「少なくとも、お母さまには」

「サマー、サマー、ハッピーサマー。金魚は英語でゴールドフィッシュュー」

空を仰ぎ、乾いた下駄の足音を響かせながら、千歳は低い山沿いの道を歩いて大きな鳥居の前に辿り着いた。鳥居の向こう側には苔生した石段が伸びて両側を様々な種類の木々が囲み、石段の上に存在する神社をすっぱりと覆い隠していた。

ご機嫌で自作の歌を口ずさみながら千歳は口笛を短く吹くと、鳥居の前の石段を幾段か登って、向かって右側の狛犬の傍に座りこんだ。漣なみのように、強くなったり弱くなったりする蝉達の合唱に耳をすませながら、千歳は鳥居の向こう側を見上げた。

「ゴメンなさい、遅くなっちゃいましたね」
「ごめんなさい、じゃねーよ」

ほぼ頂上に近い石段の上で、一人の男の子が不機嫌そうに千歳を見下ろしていた。真っ黒な髪があちこちに跳ねて、グレーがかつた青い瞳がぐるりと回って、狒犬の近くの千歳を捉える。

「そんな言わなくてもいいじゃないですか、総ちゃん」
「総ちゃん言っな！」

いきなり怒鳴った男の子に、肩を竦ませた千歳は、恨みがましく目を細めて男の子を見上げた。

「いきなり怒鳴らないで下さい。女中頭の弘子さんみたいですよ」
「弘子さんって誰だよ！俺は総兵だ！」

総兵と自分を称した男の子に、千歳は首を振って立ち上がり、石段を登り始めた。危なっかしいながらも、総兵がいる所へ辿り着いた千歳に、総兵は彼女の手を取って、神社を目指し始めた。

「え？」

頂上に辿り着き、神社の境内、賽銭箱さいせんばの前の階段に腰を下ろした直後の千歳の言葉に、総兵は耳を疑って声を上げた。

「私、もうすぐお祖母サマの家にお引越すんです。お祖母サ

マのトコなら、もつとたくさん遊べるって言われて」

「何でだよ」

「知りません。勝手に決められました、お母さまから」

お母さま、の所を強調して、千歳は膝を抱えたまま地面を睨んだ。そんな千歳を見て、総兵は黙りこくり、何も言えなくなつて下を向いた。

最初にこの神社で会つて、一緒に遊ぶようになってから何年も経っている。今さら、こんな時に離れる事になるとは思わなかった。

「けど、今度の花火大会は行けるんだろ？」

「ええ、花火大会の次の日に引越しますから」

沈んだ声のまま、千歳は地面から棒きれを拾うと、がりがりと音を立てて地面に絵を刻み始めた。総兵はそっか、と小さく呟いて、すぐに前を向いた。木々の間から、太陽の光に当たっている明るい景色が覗く。

同じ年の子どもが少なかった此処の地域では、いつも二人つきりだった。昨日までいつも神社で待ち合わせては、日が暮れるか、ケン力するまで遊び続けていたのを思い出す。

「なあ、チー」

「はい？」

棒きれを動かす手を止めて千歳が振り向くと、総兵は前を向いたまま、ぼそつと呟いた。

「花火大会、行くだろ？」

「勿論です」

「……俺と一緒にいかねえ？」
「最初っから、って事ですか」

千歳がそう問うと、総兵は頷いた。毎年、花火大会の日は絶対に誰か大人が二人の後をついて回っていたのだった。二人で行くのは予想もつかなくて、千歳は目をぱちくりさせた。その後に、すぐに笑顔になる。

「ええ、いいですよ。けど総ちゃん、迷子になんないで下さいね」
「お前にそのまま、その言葉返すわ」

予想通りの言葉に千歳は一通り笑い転げると、一息ついてからすつくと立ち上がって、賽銭箱さいせんばこの前に立った。

「何やりたいんだ、お前？」
「お願い事です」
「賽銭入れるよ」
「神サマは心が広いから、大丈夫ですー」

チーはそう言うと、ぱん！と手を鳴らして合掌した。そのまま目を閉じて、少しだけ顔を俯かせる。

しばらくの沈黙の後に、目をぱちりと開けて、手を離れた。

「何の願い事したんだ？」
「言ったら叶わなくなるんですよ」

にこっと笑うと、千歳は浴衣の袖を揺らして、総兵に手を差し伸べた。

「行きましょ、総ちゃん」

総兵が千歳の手を取ると、下駄履きにも関わらず、千歳は猪の如くスピードで走り出した。
案の定、一斉に転んだ。

(後書き)

不定期に書いていく事になりますが、どうかよろしくお願いいたします。二人の過去、いかがだったでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6070h/>

時の葉一片。 < 壺 >

2010年10月22日00時57分発行